

診時、舌背中央に粟粒大の小水疱が集簇した拇指頭大の膨隆をみとめ、病理組織学的検査の結果、リンパ管腫と診断された。口腔内病変で視野が狭く、腫瘍の境界は不鮮明であり、出血の可能性もあるため、レーザー手術の適応とした。

手術装置及び手技

我々は炭酸ガスレーザー手術装置として、メディレーザーS Model MEL-442(持田製薬)を使用した。経鼻挿管によるフローセン麻酔下に手術を行なった。口腔を開口器で開き、舌背の腫瘍を除いた全ての口腔粘膜を、脳外科用生食綿で覆って誤照射から予防した。照射出力は20~50Wで、defocused beamにより断続的に行なった。出血はほとんどなかった。照射面の発煙は、術者が左手に持った吸引管の先端を照射部に近づけることにより、ほとんど除去できた。

術後経過

術直後も、術創の疼痛はなく摂食可能であり、味覚障害もなかった。翌日、術創はやや浮腫状に腫脹し、白苔が認められたが、腫脹および白苔は日毎に軽減し、10日目には軽度の膨隆を認めるのみで、炎症所見は消退した。術後2カ月目には、軽度の瘢痕を残して治癒し、その後再発傾向はない。

結論

口腔内の境界不鮮明なリンパ管腫に行なった炭酸ガスレーザー手術は、極めて有効であった。

37. 当科における1年間の手術と反省

(第二病院 眼科)

○小室 敏郎・笹井 章子・
小掠 祐子・内野 允

眼科領域における手術全体の進歩を考えてみると、顕微鏡手術の普及と増加がある。そして、それによって術中術後合併症は減少し、患者の早期離床がなされるようになってきた。

しかし、一方で術者にはそのために、より高度な手術手技と良好な術後成績が要求される。研修医は2年間の研修生活で多くの手術症例を経験し、学んでゆかなくてはならないが、手術の修得にあたっては、指導する側も研修する側も大変気を使う。患者に満足すべき治癒をもたらすことは当然であり、未熟な術者によって術中術後の合併症などで患者に負担をかけてはならない。

当科においては、手術手技を最も良いと思われる方法に統一し、スタッフによる指導で成果をあげているが、今回過去1年間の手術成績について検討し、反省

を加えてみた。

当科での1年間の手術総数は324例で、このうち白内障138例、網膜剥離42例、緑内障29例、斜視43例、涙嚢鼻腔吻合術17例、眼瞼下垂19例、眼瞼内反症36例であった。

このうち、今回は特に白内障手術と網膜剥離手術を対象に検討を加えた。まず術者別に術中術後の合併症を調査し、これをスコアとして手術の評価を行なった。術者は研修医をAグループ、卒後10年未満をBグループ、10年以上をCグループとして、あらゆる角度から手術が成功であったかどうかを検討したが、結果的にはグループ間には特に差はなく、ほぼ満足すべき結果であった。卒後研修にあたって興味ある成績を得たので報告する。

38. ポーエン病の2例

(第二病院皮膚科)

○安田 和正・鈴木久美子・朝倉みどり・
木下 茂美・清水 弘美・砂入真知子・
平野 京子

症例Ⅰ：76歳，男子，無職。

初診：昭和55年7月。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：20年前より、高血圧および痛風にて治療中。現病歴：4年程前、右下腹部に、鳩卵大の紅斑が出現。これとほぼ同じ時期より、全身に黒褐色疣贅様皮疹が播種状に散発するようになった。以後、右下腹部の皮疹はしだいに拡大する。

初診時現症：右側腹部に、健常皮膚とは明瞭に区画される、55×30mmの、類円形黒褐色痂皮と鱗屑の付着する淡紅色のやや隆起する局面を認め、軽度浸潤を触れる。掻痒や疼痛などの自覚症はない。

経過：右側腹部の皮疹を全摘。組織学的にポーエン病と診断。昭和56年3月、右大腿内側に黒色の小指頭大の皮疹に気づく。さらに同年11月には、左大腿内側に、黒色の小豆大の皮疹が出現。両者共に組織学的にポーエン病であった。なお、本症の発症と共に、上半身に多発した黒褐色疣贅様皮疹およびやや隆起した色素斑は、生検にて脂漏性角化症であり、眼周辺にacanthosis nigricansがあるため、消化管の透視およびファイバー・スコープ施行せるも、現在のところ内臓の悪性腫瘍の発生はみられない。

症例Ⅱ：76歳，男子，無職。

初診：昭和57年7月13日。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：10年前に脳血栓。8年前に肝障害。本年2月には痛風と右関節炎にて治療中。

現病歴：6年ほど前より、左前胸部に皮疹出現し、しだいに拡大。

初診時現症：左前胸部に30×30mm、不整形の、鱗屑を伴った軽度の浸潤ある紅斑局面が認められ、中心部には、角質増殖とびらんが存在する。

経過：生検によりポーエン病と診断。以後再発および他部の発症をみない。

2症例共に砒素の服用、または注射の既往はない。以上、多発型および単発型ポーエン病について述べる。

39. 空中真菌相について一気管支喘息児の家屋内真菌分布に関する検討一

(第二病院 小児科)

○橋本 節子・木下 晴美・本城美智恵

気管支喘息の吸入性原因抗原の1つである真菌抗原の重要性については、種々の論議がなされている。これら空中真菌の種類と年間の経時変化については、幾つかの報告が見られるが、今回演者らは、家内皮革加工業という特殊環境下における気管支喘息児の家屋内の空中真菌分布、並びに臨床症状との相互関係について調査した。また、同時に比較対象として、喘息児のいない一般家庭の屋内、屋外の空中真菌分布についても調査したので、併せて報告する。

方法

対象：当院アレルギー外来で治療中の家内皮革加工業を営む8名の患児(年齢6～15歳、男7名、女1名)。採取場所：①東京都荒川区在住の家内皮革加工工場および居間、②当院病室及び屋外、③喘息児の一般家庭内居間(女2名)、④非喘息児家庭内居間(2名)。

採取方法：ジャガイモ-ブドウ糖寒天平板5枚を10分間開放暴露による落下法を用い、25℃14日間培養し、出現した集落を計数後、釣菌分離し、同定した。

採取期間：1980年1月より1981年3月まで1年3か月間、月2回採取を行なった。

結果

各場所での空中真菌の出現傾向は4月より増加傾向を示し、ピークは7月、11月に見られ、以後減少傾向を示した。屋外では屋内に比べ、全体の菌数増加傾向が見られた。仕事場と居間では、出現した菌種および菌数の年間経時変化に差は認められなかった。また、喘息児8名中、真菌抗原検出で陽性を示した2症例において、喘息発作増悪期と真菌の出現状況との関連性

では、屋内より屋外での真菌分布状況との相関が示唆された。また、出現菌は不完全菌が多数を占め、特に *Penicillium* 属が最も多く見られ、ついで、*Alternaria* 属、*Aspergillus* 属、*Arthrinium* 属、*Aureobasidium* 属、*Cladosporium* 属、*Trichoderma* 属などの菌類が多数出現した。これら出現した *Penicillium* 属は合計37種類同定され、また、*Aspergillus* 属は10種類同定された。

【特別講演】

眼科領域におけるヘルペスウイルス群による疾患について

(眼科) 内田 幸男

ヘルペスウイルス群は人体に侵入すると共生関係が続け、宿主の免疫能低下などを契機に潜伏状態から活性化し、疾患の再発をきたす。眼科領域で問題となるのは単純ヘルペス、水痘一帯状ヘルペス、サイトメガロの3者であり、これらによる疾患の概要を述べる。

単純ヘルペスによる角膜炎は角膜感染症の中で重篤さと頻度の高いことにおいて、最も重要視される。発病の初期段階でみられる樹枝状角膜炎は本症の基本型とされる。さらに進展すると病変は角膜深部に及んで実質型、ないし複雑型と呼ばれる病型となり、角膜混濁のため著しい視力障害をきたす。近年は後者の病型が増加の傾向を示している。本症の間歇期におけるウイルスの潜伏場所は、三叉神経節とされている。基本型の治療には抗ヘルペス剤のIDUが汎用されているが、最近はその副作用として過敏症による眼瞼結膜炎がしばしばみられる。複雑型の発生には免疫学的機序が関与しているとされ、抗ウイルス剤による治療は効かない、ステロイド点眼との併用が行なわれるが、投与量の加減がむずかしい。

水痘一帯状ヘルペスも同様に主として角膜炎、虹彩炎の形で眼を侵す、単純ヘルペスに似た病変を作ることもあるが、また特有の病像をとることもある。皮疹が特徴的でないときは鑑別が困難となる。このような場合の診断には、血清補体結合抗体価、病巣擦過物の蛍光抗体による検索が有用のことがある。

サイトメガロウイルスは先天的サイトメガロ症を起こすが、最近では免疫能が低下した成人における網脈絡膜炎が注目されてきている。